

短報

マツヨイグサ属雑記 (4) (浅井康宏)

Yasuhiro ASAII: Notes on Some Species of *Oenothera* in Japan (4)

4. ヒナマツヨイグサについて

北アメリカ原産のヒナマツヨイグサ (*Oenothera perennis* L.) の帰化が我が国で知られたのは、昭和24(1949)年7月2~3日に、国立科学博物館主催の植物採集会が群馬県の神津牧場付近を中心に行われた折で、同館の奥山春季氏が本種と同定 (*O. pumila* L. として) し、上掲の和名を与えた経緯をもつ。その後、各地から散発的に本種の存在が報告されているが、これは主に最初のケースの場合と同様に、輸入牧草の夾雜種子に由来するものようである。

また、本種は米名 Small sun-drops が示すように、本属のものとしては小ぶりな草姿をもち、花も可憐で小さく、しかも筆者のいう昼咲系 (Day-flowering) であることから、最近の山草ブームに関連して、かなり栽培もされるようになってきた。

そこで本種を改めて検討してみると、植物体に白色の伏毛を有するもののほかに、短開出毛をもつものが認められる。これは *O. perennis* L. var. *rectipilis* S. F. Blake (1923) にあたるもので、ケヒナマツヨイグサと呼んでおく。また従来から知られている伏毛をもつ母種を、フシゲヒナマツヨイグサとして区別しておきたい。

なお、本種はしばしばヒメマツヨイグサと誤記または誤称されているが、これは明らかに間違いで、この和名の提唱者の意向は、あくまでも「姫」ではなく、「難」であることを銘記すべきである。

5. ケナシミズリーマツヨイグサ (新称)

筆者が、我が国へ渡來した本属の中でも、特異なグループに属するミズリーマツヨイグサ (*Oenothera missouriensis* Sims, Bot. Mag. 39: t. 1592, 1813) の存在について報告 (本誌 47: 253~255, 1972) してから20余年が経過した。

その後、本種についても種々検討を加えてきた

が、通常の伏毛を有するものに混じって、全株無毛のものが認められる。これは *O. missouriensis* Sims var. *oklahomensis* (Norton) Munz – *O. oklahomensis* (Norton) A. S. Hitchc. にあたるもので、原産地のアメリカ合衆国のカンザスやオクラホマを中心に生育するとされている。これに上掲の和名を与え記録しておく。

6. 再びオオバナコマツヨイグサについて

筆者は、かつて我が国にみられるコマツヨイグサ (キレハマツヨイグサ) を俎上にのせ、その観察結果を報告 (本誌 48: 182~186, 1973) しておいた。そして従来、いわゆるコマツヨイグサ *Oenothera laciniata* Hill (1767); *Raimannia laciniata* (Hill) Rose ex Britton & Brown (1913) – *O. sinuata* (L.) Moench (1794) – *O. minima* Pursh (1814); *O. sinuata* var. *minima* (Pursh) Nuttall (1818) とされてきたものに2つあり、そのうちの花の大きなものをオオバナコマツヨイグサ *O. laciniata* var. *grandiflora* (S. Watson) Robinson (1908) として区別した。

その後、引き続き故久内清孝、原 寛両先生のご示唆にしたがい、全国各地のものにつき広く調査・検討を加えてみたところ、現状では我が国で古くから知られていた典型的ないわゆるコマツヨイグサよりも、むしろオオバナコマツヨイグサの方が普通であり、各地でこれをコマツヨイグサの名で呼んでいることが多いことが判明した。

ところで本種の原産地である北アメリカでの最近の研究結果を参考しつつ、このオオバナコマツヨイグサそのものについて再検討を試みたところ、前報においても若干ふれておいたように、これは花のみが単に大きく、花色が濃黄色を呈するだけでなく、その他の諸点でも差異を有し、これを別種として扱うのが妥当と考えるに至った。

そこで、これを改めて独立種、すなわち *Oenothera grandis* (Britton) Smyth, Trans. Kansas

Acad. Sci. 6: 160 (1899) — *O. sinuata* var. *grandiflora* S. Watson (1873) — *O. sinuata* var. *grandis* Britton (1894) — *O. laciniata* var. *grandis* (Britton) Rose ex Britton & A. Brown (1913) — *O. laciniata* var. *grandiflora* (S. Watson) Robinson (1908) と認め、これに対して新たにオオキレハマツヨイグサの名を提唱することにしたい。なお本種のタイプ標本の産地は、アメリカ合衆国テキサスの Austin 近くの砂丘地帯の由で、現在の我が国での生育地と同様で興味深い。

ちなみに筆者は、これに対して従来、仮にハゴロモマツヨイグサなる名を一部の方に披露しておいた。確かに本種の下部のもの（特に根生葉）は、羽裂あるいは波状に切れ込むものの、上部のものはほとんど全辺となるので、この名はあまり適切なものと考えられない故、この使用を保留することとしたい。

なお、この問題に関しては、現在、筆者の手元に蒐っている諸資料をもとに、近似種との比較を含め、さらに検討を実施中であり、その詳細は別報に譲りたいと思う。

7. マルバコマツヨイグサ（新称）

周知のようにコマツヨイグサは本属の Raimannia 節の中でも、最も広く世界各地に帰化している種類である。したがって当然のことながら、従来、若干の変異品が認められているが、そのなかで葉がほとんど羽裂せず、多少卵形を呈し全辺のものがある。各地から筆者のもとに寄せら

れている標本中にも、これに該当するものが見出される。これは *Oenothera laciniata* Hill form. *integerrifolia* Jansen & Kloos (1922) にあたる。これに上掲の名を与えておく。

8. オオメマツヨイグサ

以前から本州の中部の高原地帯などに、草姿はメマツヨイグサ (*Oenothera biennis* L., s.l.) に似ているが、より花の大きなものの存在が気になっていた。これを各地のものについて検討してみたところ、オオマツヨイグサ (*O. glazioviana* Michelini — *O. × erythrosepala* Borbás) とメマツヨイグサとの間に生じた雑種と考えるのが妥当との結論に達し、これをオオメマツヨイグサと呼んでおいた。

このようなものの存在は、欧米諸国においても夙に知られており、葉や花部の形態などは、ほぼ両者の中間的性質を備えているが、個体によって若干の差異がみられる。しかしオオマツヨイグサに比較して葉が波うたず、花弁は若干小さく、葉の鋸歯が浅いこと、萼片が暗赤色を帯びることが多いのは良い特徴である。現在、ヨーロッパの一部では、このようなものを Intermediate Evening-primrose として扱い、これに *O. fallax* Renner をあてている。はたして我が国で見られるものが、これに該当するか否かはその母種自体の問題も関係し、一概に決めるることは難しい。今後、細胞遺伝学的見地からも詳細な検討が必要と考えられる。

（東京歯科大学）

（本誌 61 (1): 30-32, 1986より続く）

アブラナ科の帰化植物オニハマダイコン追記（淺井康宏）

Yasuhiro ASAI: Additional Notes on the Distribution of *Cakile edentula* (Bigel.) Hook. in Japan

北アメリカ東部沿岸地方の原産で、特異な多肉質の海浜植物であるオニハマダイコン (*Cakile edentula* (Bigel.) Hooker, Fl. Bor.-Amer. 1: 59, 1830 — *Bunias edentula* Bigelow, Fl. Bost. 157, 1814) の帰化が、我が国で知られてから既に10余年を経過した（淺井、本誌 57: 187-191, 1982）。その後、本種は最初の発見地である新潟県村上市を中心に同県下一帯に拡がり、さらに隣接の山形

県（酒井 1991）や秋田県（藤原 1993）にも生育が知られるに至っている。一方、筆者は北アメリカ西海岸での本種の分布経過を例にあげ、我が国へ侵入後の分布状態の推移を、年代を追って正確に記録することを希望しておいた（淺井、自然誌研究雑誌 1: 9-18, 1991）。

ところで最近、北海道日高地方のフロラに造詣の深い高橋 誠氏が本種を採集（1995. 7. 30）さ